

巻頭言

甲南大学教育学習支援センター所長 高 龍秀

日本における平均的な成績の大学生の事例を聞いて、驚かされ、考えさせられたことがある。暗記の比重が多い科目の場合に、定期試験が終わると、心の中で「これでもうこの科目の勉強はしなくていいわ」と思い、1週間もすると「この科目の知識は全く残っていない」という例が見られるとのことだ。教員は一生懸命に「教えよう」として、配布資料や授業で使うスライドを工夫したつもりでも、学生の視点からすると「身についた力」はかなり少ない。この教える側の努力と学ぶ側の成果のギャップをどう埋めるのかが現在の大学教育に問われている課題といえよう。

この点に関連して、2018年2月21日に開催された甲南大学FD委員会で市野泰和先生が紹介した事例は大変興味深いものであった。この講演会で米国の研究者が大学教育を改善する7つの法則として、1. 学生と教員のコンタクトを促す、2. 学生同士の意見交換や協力を展開する、3. アクティブラーニングを促す、4. 迅速なフィードバックを与える、5. 学習作業における時間配分を強調する、6. 強く期待していると伝える、7. 学習の多様な能力と方法に気を配る、を指摘していることが紹介された。これらの観点を参考にしながら、アクティブラーニングや多様な手法を活用して大学教育の実態を充実させることが求められている。例えば、事前に動画を見たり資料を読んで課題をまとめるなどの宿題を課した上で、授業でそれに関連してペアワークやグループワークを行い自分の考えを他の学生に説明する。クリッカーなどを活用し問題への回答分布を迅速に学生が見えるようにしたり、My Kona nなどを活用し学生の質問に迅速なフィードバックを与えることも可能かもしれない。学生が講義を「聞く」だけでなく、リアクションペーパーやレポートに「書く」、ペアワークなどで他の学生に「教える」など多様な行為を通じて、具体的に学習者の力が身につくような授業の改善が求められている。

本学が進めている、ラーニング・アシスタント（LA）も上級生が下級生に対して教育的なアドバイスを行うことで、教えることで学ぶ（Teaching Learning TIL）という効果をもたせたい。さらにLAや学習者に対して、我々教員がどのように関与やサポートをするのかという課題も改善すべきである。

本紀要に投稿された多くの教育実践の事例を通じて、本学の教育活動の実践交流と質的発展に寄与できれば幸いである。